

292. 平成11年度滋賀県下における 発掘調査の紹介 (その3)

15. 青銅器鑄造関係遺物を発見

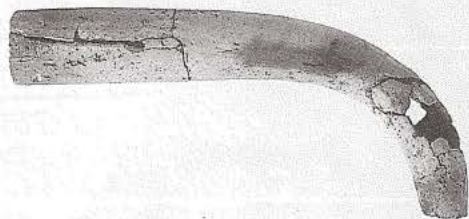
能登川町山路 石田遺跡 (4次・6次)

石田遺跡は、鉢光寺川と山路川にはさまれた微高地上に立地する。過去数次にわたる発掘調査の結果、環濠を有する弥生時代後期の集落跡であることが判明し、また断続的ではあるが中世まで存続した遺跡である。

今回の発掘調査は、民間の集合住宅建設に伴うもので、平成11年10月から1ヶ月間実施した。調査面積は約600㎡である。調査の結果、遺構は耕土直下約30cmで検出し、弥生時代後期の環濠や掘立柱建物などを確認した。環濠内からは、弥生時代後期の土器のほか、建築部材などの木製品や青銅器鑄造関係のフイゴの羽口、残渣が出土した。

フイゴの羽口は完形品で、法量は長さ32cm、先端部の外径3cm、内径2cm、根本部分の外径5.5cm、内径3.7cmを測り、形状はL字を呈している。先端部は、熱を受けて変色し、内面には銅の銹が数ヶ所に認められる。根本部分内面は、さらに送風管を接続するためか、若干ラッパ状に開いている。

また出土した残渣は、真土が高温の金属によって発泡し金属が付着したもので、分析の結果、銅・錫・鉛などの金属成分が検出された。この残渣は、湯を取り出すときに用いる取瓶の内側に付着したものと考えら



出土したフイゴの羽口

れる。

以上のことから、当遺跡では青銅器生産が行われていたことは確実であり、青銅器生産の広がりや弥生集落を考える上で大変貴重な資料となった。なお、遺跡内から銅銹が3個体出土していることから、主に銅銹の生産がおこなわれていたと考えられる。

今後、周囲の調査で青銅器や鑄型の出土が期待される。

(能登川町教育委員会 西 邦和)

16. 中世の石敷き道路を発見

愛知川町市大字市 市遺跡

市遺跡は、愛知川右岸の自然堤防上に立地する、約50ヘクタールに及ぶ広大な遺跡である。昭和57年度以来の数次にわたる調査により、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが解っている。今年度の調査は愛知川調整池に伴い、遺跡の南東端にあたる面積10,000㎡について実施した。

今年度の調査では、調査地の西側の自然地形の落ち際で、6世紀～13世紀頃まで機能していたと考えられる、幅14m・深さ1.8mのほぼ南北方向に流れていた自然流路を検出し、さらにその東側では自然流路にそって同時期の建物・溝・井戸等を検出している。



石敷き道路

石敷きの道路は、前述の自然流路が埋没した後に、造られたもので、幅3m・長さ16mで検出した。ほぼ東西方向を向いており、東側から西側にかけて穏やかに傾斜している。直径5cm～20cmの偏平な川原石を敷き詰めて造られており、その下層には直径1cm～3cm

の小石や、砂が約30cmの厚さで認められている。

(財滋賀県文化財保護協会 坂梨咲子)

17. 上蚊町古墳群から「突起石」を発見 秦荘町上蚊野 上蚊野古墳群

秦荘町は、「近江愛知郡司解」などの文献に残る渡来系氏族「依智秦氏」によって大規模に開拓された地として知られている。

上蚊野古墳群は、秦荘町大字上蚊野地先に所在し、湖東平野の北東部、鈴鹿山系から流れる宇曾川の右岸に位置する。当古墳群は、元々、102基の古墳が存在し、隣接する大字蚊野外の196基の古墳群を合わせて、県下最大級の後期古墳群として有名である。

今回の調査は、秦荘町の史跡上蚊野古墳公園整備事業に伴いたぬき塚古墳などを対象に実施した。たぬき塚古墳は、直径約15m、残存高が約2.3mを測る円墳である。



たぬき塚古墳玄室

考えられる石材が並べられている。そして、奥壁近くの左側壁（奥壁から見ると）の床面から約35cmの高さで、側壁から約15cm突き出した「突起石」を1石確認した。滋賀県内では、斎瀬塚古墳（マキノ町）と北谷5号墳（草津市）に次いで3例目である。「突起石」は、5世紀後半頃の九州北・中部に多く見られる特徴であった。

その他に百塚古墳、こうもり塚古墳の調査では、墳丘規模の確認を行った。百塚古墳は、直径約22mで、現存する高さが約5.4mである。北側墳丘トレンチでは、約20cm角の石が規則性をもち検出されていることから葺石があったと考えられる。こうもり塚古墳は、直径約19mで、現存する高さが約3.2mであることが確認された。

(秦荘町教育委員会 竹村吉史)

18. 中世寺院の遺構群を検出

多賀町 敏満寺遺跡

敏満寺遺跡は、名神高速道路多賀サービスエリアが位置する丘陵上に広がる遺跡であり、これまでの調査においては、縄文時代～戦国時代の遺構・遺物が確認されている。

今回の発掘調査は、下り線サービスエリアの駐車場拡幅工事に伴って、平成9年度より約17,900㎡を対象として行われているもので、前年度までに約7,400㎡の調査が終了している。今年度は、残り対象面積のうち約8,400㎡について発掘調査を実施した。

今年度の主な成果としては、戦国時代頃の遺構群が確認されている。具体的な遺構としては、礎石建物1棟・掘立柱建物2棟以上・井戸1基・溜め井戸5基・竪穴建物2棟・甕ピット1基のほか、多くの溝・土坑・ピットがある。出土遺物は、これらの遺構やその周辺から、土師皿・輸入磁器（青磁・白磁）・国産陶器（古瀬戸・瀬戸美濃・信楽・常滑）・石臼などが出土している。

これらの遺構群の特徴としては、掘立柱建物などの遺構が、溝などによって一定の大きさに区画されていることや、甕ピットや畝を伴う溝状施設といった特殊な遺構が含まれることである。

この他にも、戦国時代以外の時期にあたる遺構として、平安時代後半の木棺を伴う土壇墓や時期不明の炭窯が確認されている。

平安時代後半の土壇墓は、長軸2.15m・短軸1.5m・深さ0.23mの墓壙から、木棺に使用していた釘8点以上・刀子2点・土師皿40枚程度が出土している。

炭窯は、時期不明であるが、長さ約10m・幅約0.8mを測る細長い燃成室のもので、等高線に対して平行に近い角度で構築されている。横口は、谷側に6ヶ所確認している。

(財滋賀県文化財保護協会 中村智孝)



畝を伴う溝状施設

19. 戦国時代の山城で「破城」跡を確認

米原町番場 鎌刃城跡

鎌刃城跡は米原町番場の南東、標高384mの山頂に築かれた戦国時代の山城である。築城年代は明らかでないが、一説には箕浦庄の地頭であった土肥氏が築城したものと伝えられている。今回の発掘調査は昨年度に引き続き、町内所在の中世城館跡の詳細分布調査の一環として実施した。

調査は昨年度検出されていた内升形虎口に隣接する土塁囲いの曲輪の一部にトレンチを設定して実施した。その結果昨年度の調査で部分的に検出されていた、曲輪への進入路と思われる両側石垣積み通路遺構の全容が明らかになった。この道路は幅約1.3m(四尺)を測り、残存高は最高で1.5mほどであるが、築城当時は約3~4mの高石垣であったと考えられる。通路の中央部両側には片側3箇所づつ併せて6箇所の礎石が検出されており、門柱礎石と考えられる。またこの門は土塁上部に築かれた多間櫓の櫓門の可能性が高い。



通路遺構及び門柱礎石検出状況

今回の調査で出土した遺物には、土師器皿、瀬戸美濃産陶器(天目茶碗・皿・壺・播鉢)、備前産大甕、白磁端反皿、青磁稜花皿の他に、山城跡からの出土は珍しい漆器椀や恒久的な建造物の存在を示唆する多量の鉄釘、さらには食用か儀式用かは不明であるが海産の貝殻など多様な物が見られる。遺物の年代観としては、その大部分が16世紀後半と考えられる。

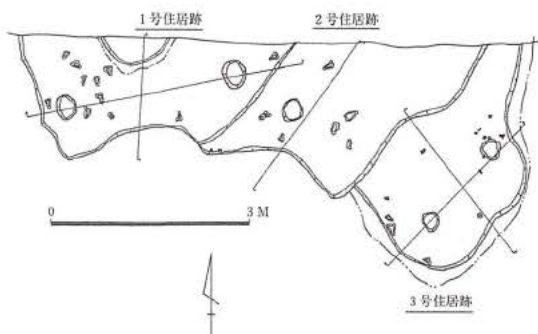
こうした調査成果から鎌刃城は戦国時代後半の山城であるにも関わらず、城内の主要部分に石垣を採用していることや、豊富な生活遺物が出土していることから、臨時的な施設ではなく、日常的に機能していたことが明らかになってきた。また、通路遺構に伴う石垣の崩落状況を見る限り、明らかに人為的に破壊されたものであることから、文献上では知られていた「破城」(城割り)についての具体例として注目される。

(米原町教育委員会 土井一行)

20. 縄文時代後期集落を確認

長浜市 平方遺跡

平方遺跡は姉川沖積地の南西部に位置する。遺跡は縄文・中世・近世の複合遺跡であり、昨年度の調査では縄文後期の住居跡11棟・土壙群、中世の溝跡、近世の水路とピット群を検出した。特に、今回の調査は住



平方遺跡 縄文住居跡群平面図

居跡群の集中した位置の南側隣接地にあたるため、大きな成果が期待された。

調査では、4棟の縄文後期とみられる住居跡、土壙群、近世水路跡、ピット群を検出した。また、住居跡の床面からは、昨年度の調査と同様に、ヒトの足跡が検出された。ヒトの足跡から推定できる、年齢の平均は20才前後であり、60才をこえる女性と考えられる足跡もあり、大変興味深い成果となった。さらに、土壙墓とみられる三基の楕円形土壙からは、酸性土のため傷みの激しい縄文土器が出土しており、この遺構群よりも、南は空白地となりまったく、人の手が加わった痕跡が認められなかったため、集落の南端位置と考えられそうである。とすれば、北を平方町として南限が四ツ塚町にあたるとする集落の可能性はある。そして住居跡群をはじめとする過去からの調査成果と合わせて考えてみるならば、その配置に規則性がないため、非環状集落となりそうである。尚、報告書は現在作成中である。

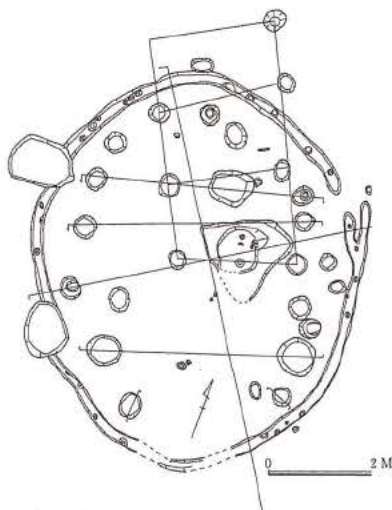
(長浜市教育委員会 西原雄大)

21. 弥生前期の竪穴住居を検出

長浜市宮司町 宮司東遺跡

宮司東遺跡は、弥生時代、平安~中世の複合遺跡であり、市内宮司町の北東部に位置する。

今回の調査では、近世~近代の宮川藩陣屋および県



宮司東遺跡 弥生2号住居跡平面図

序遺構、中世においては、垣見氏支配下とみられる集落遺構、そして弥生前期の竪穴住居を2棟検出した。

中世の遺構は、井戸跡2基、堀立柱建物跡が6棟、柵列、堀2基、溝7本というもので、3期に分れて集落を構成しており、

12世紀中頃から15世紀後半頃まで存続していたようである。文献的にも、垣見氏の活躍した時代であり、調査地より西方100メートルには、垣見氏館跡が存在する。以上のことから、垣見氏支配下の集落跡ではなからうか。

弥生時代の遺構は2棟の竪穴住居跡のみで、うち2号住居跡は南北8.5メートル、東西6.5メートルという不整形な楕円形の平面プランであり、この時代としては珍しく、多柱穴列を持つ構造となっている。また、床面よりまともな、I様式Ⅳ期頃の弥生土器とすり石等の石器が出土した他、中央の炉跡埋土内から、石斧片と火を強く受けて焼けて傷んだ土器片が出土した。しかしながら、住居跡は中・近世期の削平によってその大半を失っており、1、2号住居跡とも残存度はかなり低いものであった。市内においては、これまで弥生前期の住居跡の検出例は皆無であったため貴重な成果であると言える。

さらに、近江緑袖の破片が1点出土しており、近隣の坂田郡衛とみられる宮司遺跡との関連が考えられようである。

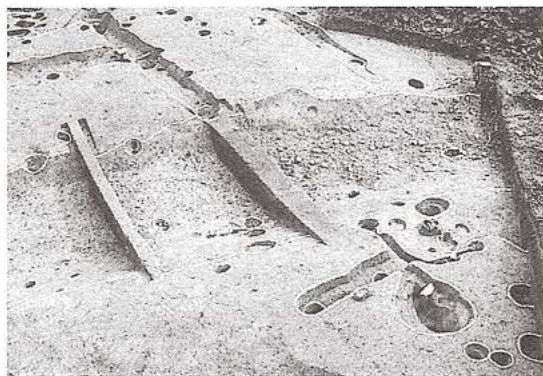
(長浜市教育委員会 西原雄大)

22. 弥生後期の布堀基礎の建物を検出

新旭町熊野本 熊野本遺跡

熊野本遺跡では、平成9年度から個人の別荘地建設工事に伴い発掘調査を継続している。これまでの発掘調査により竪穴住居30棟、堀立柱建物、ピット群、土坑、古墳、墳丘墓等を検出している。集落域は、6haにも及ぶ大規模な高地性集落である。遺物には、土器の他に多量の鉄器や石鏃を中心とした石器類、墳丘

墓からガラス小玉、L字状石杵が出土している。本年度は、調査区20～27の調査を実施した。調査の結果、調査区20～22・25・26から弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居14棟以上、堀立柱建物2棟、ピット群等を検出した。これらの住居や包含層から石鏃の他に大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧、小型方柱状片刃石斧などの石器が出土した。調査区25では、布堀基礎の建物(SB-1)を検出した。幅約0.7m・長さ約8mの溝が掘られ、その中に約2.3mの間隔で柱穴が確認された。建物の南半分が削平されているため遺構の残存は良くな



調査区25 全景北より

いが、建物規模は、1間×3間(3.6m×7m)と考察され、建物の時期は後期後半と推測される。

また、この調査区は、熊野本35号墳の墳丘南東部も含まれている。墳丘の北側半分が削平されているため主体部は確認できなかったが、墳丘裾部から幅約3.5m、深さ約1.2mの周溝と考えられる溝SD-1を検出した。溝内の土器が弥生時代後期に限られることや直線的に伸びることなどから、後期の区画溝の可能性が指摘される。この溝の性格の解明については、今後の調査に委ねられる。35号墳の東方には36号墳が位置しており、調査区20の調査で墳丘南裾部から貼石を検出した。貼石上から後期末の土器が出土して墳丘墓の可能性が指摘される。35・36号墳が立地する低い尾根の先端には、調査区18の墳丘墓が存在している。熊野本遺跡における墓域や墓制を考察する上での貴重な資料である。

(新旭町教育委員会 横井川博之)